

「我身にたどる姫君」注解(三)

武原弘  
宮田尚  
守屋省吾

〔本文〕

はら／＼のみこたちいとおほくおはします。皇后宮には春宮・女三宮・二のみこ、中宮には三のみこ・女四宮、そかうでんには女一・女二のみこ、さらでは更衣ばらと、おほくおはする、御かたちをはじめ、いづれとなくおひいで給ふなかに、二のみこ・女三のみこの御光には、ならび給人ぞなかりける。たゞ人には、とのゝ三位中将なん、たゞひなきさまにおもはれ給へる。「春の花・秋の月ときこえんにも、いとようよそへられぬべき御さまもなれど、女三宮には猶たとへきこゆべきものなくや」といふは、かたへはをしはかりごとのあまりなるにや。たれかはみあらはしきこえたる。とのには、たゞひとゝころおはする女君をかぎりなくもてかしづき給さま、なのめならんやは。又たゞひおはせんに、猶すぐれたるはことなるべし、ましてとりかへもたまへられねば、これをさへあらぬかたにやと、中宮はうらめしくのみおぼしめしたるも、ことほりにいとおしけれど、たがせしことならぬ御位も、いつしかと心もとなきには、なをぞつりするあまなめる。げに、とてもかくてもとげがたきいもせの山の御うらみなめり。

〔語釈〕

○はら／＼のみこたち〓「はら／＼」は皇后、中宮以下あまたの女御、更衣。主上の皇子、皇女が多くの腹に生まれていることをいう。○そかうでん〓承香殿。ここは承香殿の女御の略。○いづれとなくおひいで給ふなかに〓誰がどうと劣り勝りなくぞ立派に成育なされたなかも。○御光〓光り輝く美しさ。源氏、横笛「いみじう白う、光美しきこと、御子達よ

りもこまかにをかしげにて」。○春の花・秋の月〓春の花、秋の月ともに美の最高の象徴。多くの皇女の美しさを象徴的にいったもの。○いとようよそへられぬべき御さまもなれど〓大層よくたとえられそうな皇女様たちのご様子であるが。「よそふ」は、なぞらえる、比べる、たとえる、の意。○かたへはをしはかりごとあまりなるにや〓一方だけを重んじた推測があまりにすぎたのではなからうか。○との〓関白。○なのめならんやは〓難点がないわけでもない。○又たぐひおはせんだに〓又かりに他に女君がいらっしやる場合でさえも。○ましてとりかへもたまへられねば〓実際にはひとり女君で、他に女君をお持ちでなかつたので。○これをさへあらぬかたにやと〓この大切なひとり女君をさえ意外な方面にかたづけるのではなからうかと。「これをさへ」とあるのは、注解(一)において関白が自分の関係者(甥)である中宮腹の皇子の春宮冊立に無関心であつたばかりではなく、皇后腹の第一皇子を擁立するがごとき態度をとつた上にさらに自分の娘をも：の意。関白のひとり娘ともあらば当然后がねなのである。○たがせしことならぬ御位〓だれがしたということでもない御位、すなわち帝位。○なをぞつりするあまなめる〓古今集、恋一「伊勢の海につりするあまのうけなれや心ひとつをさだめかねつる」(詠人しらす)による。中宮は伊勢の海に釣をする漁師のうきのようにいろいろ思い悩むことが多いことをいう。○とてもかくてもとげがたきいもせの山の御うらみなめり〓後撰集、雑三「はらからの中にいかなる事かありけむ常ならぬさまに見えければ〓睦まじき妹背の山の中にさへ隔つる雲のはれずもあるかな」(詠人しらす)による。中宮、関白が兄妹でありながらその仲らしいのしつくりいかなないことをいう。

〔通釈〕

帝には多くの腹に皇子、皇女が沢山いらっしやられた。皇后腹には春宮(第一皇子)、第三皇女、第二皇子、中宮腹には第三皇子、第四皇女、承香殿の女御腹には第一皇女、第二皇女、そのほか更衣腹にも、といった具合に大勢いらっしやつた。これら多くの皇子、皇女はご容貌をはじめとして、誰として劣り勝りなく成育なされたが、その中でも第二皇子、第三皇女の美しさには肩をならべる方はいらっしやらなかつた。臣下の中にあつては関白殿の三位中将が群を抜いてすばらしいお方との評判であられた。多くの皇女を「春の花、秋の月」とその美しさを賞讃するにつけても、大層よくたとえることのできる様子であったが、とりわけ第三皇女の美しさはたとえ申し上げるものがないというのは、どうも一方(皇后腹)だけを重んじた推測があまりに過ぎたのではなかつたか。とにかく誰がこのようなことをいい出したのであろうか。関白殿はひとり娘の女君をこの上もなく大切に養育なされていらっしやつたが、その態度には難点がないというわけでもなかつた。また仮にこの姫君以外に女

のお子様がいらっしゃったとしても、実在する姫君と同様際立って優れていたに違いなかったろうが、実際には天にも地にも姫君はおひとりしかお持ちでなかったから、叔母上にあたられる中宮様は（かつて春宮決定の折、関白としては当然自分の縁者である第三皇子を擁立すべきであったのに、皇后腹の第一皇子に決定したと同じように誰が考えても后がねとして疑えない）この姫君をまで意外な方面にかたづけやしないかと恨しくお思いでいらっしゃったのも、まったくお気の毒ではあったが、誰がしたというわけでもない帝位も早く自分の方にと不安であるにつけても、あれこれ心ひとつに思い悩むことが多いようであった。とにかく関白と中宮は兄妹でありながら互いに心の融けあわない仲らしいであった。

〔本文〕

三位の中將は、さま／＼けしきばみきこゆる人のみおほかれど、さらにおぼしもよらず、女三のみこの御さまかたちをのみ、夢のなか・まぼろしのつてにも、見ばやきかばやといりもみ給えば、さらにうきたる心なく、せちにすくよかにて、うへはわざとあだめきても見え給はず、なべての女には心もとどめず、まめやかにけちかきまではならし給ふ人もありがたうてのみす／＼し給ふを、おとゞ・は／＼うへは、これをさへなげき給ふ。このみこは、うたて世の人のそしりきこゆるまであだめき過ぎて、か／＼らぬ野山のはてなく、よる夜なかあくがれ給をぞ、中宮わたりには、いともかる／＼しく思ひいふべかめる。は／＼みやはた、えもいはずきよらにて、こをさいなむものどだにしり給はねば、心にまかせてみだれ給ぞことほりなるや。三の宮をば兵部卿ときこゆ。御かたちも、をとるといふべきにもあらねど、猶もてなし給からも、かれはこよなきなるべし。御さえはしも、まだきにたぐひなくかしこおはします。御心にも、あまりけしからぬまでなどはおもひよらず、宮にあさ夕さぶらふなみ／＼をだに、おぼろげにては御らんじかけ、はかなしごとこのたまはするならひもなし。をのづからさばかりとおぼしめつることは、いみじく物ふかく、わざとこと／＼しかるまじき／＼はまで、あながちに人めをつ／＼み、さりげなくもてなさせ給へれば、よ／＼もの御ひとりねにてぞあかさせ給ふ。かぐやひめなにがしを、山のなか・そのの雲よりもとめいずば、人にさばかり心とどむとも見えきかれじ、女といふとも、かたみになのめにおもひなずらふばかりならんには、さぞおはしますとみゆるばかりはあらじ、などのみつ／＼ませ給へる御本じやうも、くるしげなり。二のみこは、たゞこのかたに、御身もいたづらになるばかりあだめかせ給へれば、あやしのふせや、いひしらぬあまのすみかにも、ありとしきかばたづね見るばかりとの

みおぼしとりたれば、いづれもくるしき御心のうちなるべし。春宮ぞ、かやうのかたもいとよくみさほに、なべての人さまにおはすべき。

〔語 釈〕

○けしきばみきこゆる人のみおほかれど||愛情を知らせ顔の女性ばかり多いが。「けしきばむ」は心が表に現われる、心を顔色に表わす。 ○せちにすくよかにて||大層しつかりしていて。「すくよか」は性情がしつかりしていること。 ○まめやかにけぢかきまではならし給ふ人もありがたうてのみすぐし給ふを||本格的に身近くに馴らし置かれる女もないような状態でおすごしになっていらつしやるにつけて。三位中将には召人めいた女がいなことをいう。 ○うたて世の人のそしりきこゆまであだめき過ぎて||格別に世間から非難をお受けになるほどどうわつき過ぎて。 ○かゝらぬ野山のはてなく||関わりを持たない女性はないほど。「かゝらぬ野山」は比喩的表現。 ○みや||二の皇子の母宮である皇后。 ○こをさいなむものゝだにしり給はねば||母として我が子を責めることさえも御存知ないから。 ○猶もてなし給からも||周囲がもてはやされることもあって。また、意識して装ってられるから、と兵部卿を主体として解せないこともない。 ○かれ||兵部卿。 ○ざえ||漢学の才。 ○あまりけしからぬまでなどはおもひよらず||感心できないと思うほどには女性への関心も高くなく。 ○おほろげにては御らんじかけ||安易に関心をお示しになったり。 ○をのづからさばかりとおぼしめつることは、いみじく物ふかく||自然とそうだと思ひ初めなされたことはどこまでも深く考えられ。 ○わざとことゝしかるまじき||はまで||別段とりたてていうこともない身分の女にまで。「きは」は身分、階級。 ○人にさばかり心をとゝむとも見えきかれじ||他人から女性に対してそれほど関心があると思われまい。 ○かたみにのめにおもひならずらふばかりならんには||互いに格別に情けを交わし得るほどの人ならば。「なのめに」は「なのめならず」の意。 ○さぞおはしますとみゆるばかりはあらじ||いつも無関心でいるとばかり思われたくない。「さ」は前文「人にさばかり心とゝむとも見えきかれじ」を受ける。 ○などのみつゝませ給へる御本じゃうも||とばかりご遠慮がちなご性格も。「御本じゃう」は御本性。 ○このかた||恋愛に関すること。 ○いづれも||第二皇子、第三皇子それぞれに。 ○かやうのかたもいとよくみさほに||女性との愛情の方面にも適度に節操をお持ちで。

## 〔通釈〕

三位中将は、いろいろ愛情を知らせ顔の女が多いが、そういう女には関心を示されず、もっぱら第三皇女のご様子、容貌を現実にはもちろんのこと夢の中、幻のついでにも見たい聞きたいと焦慮されていたので、他の女に対してはさらさら浮気心もなくむやみとしっかりしておられ、表面は特にうわついた様子は見え、本格的に身辺に馴らし置かれる女もない状態であられるにつけても（浮気すぎるのもまた心痛の種であるが、また一方）かかる中将の状態を関白、母上とも心配しておられた。第二皇子は格別に世の非難をお受けになるほどまでうわついて、関係のない女はないというほど夜中といわずうかれ歩いておられるにつけて、中宮方では軽々しく思ひもし言ひもするのであった。皇后はこの上もなく上品であらせられ、我が子を責めるものだともご存知でないから、第二皇子はこれをいいことにして不品行をなされるのも当然のことであつた。第三皇子は兵部卿と申し上げた。ご容貌も特に劣っているというわけではないが、周囲がもてはやすこともあつて格別であられた。学才もまだ若いのに大変賢才であられた。ご性格も感心できないと思うほどは女に対する関心はなく、宮に朝夕伺候する普通の女房にさえ、安易に関心を示されたり、深い思慮もなく冗談を口になさることもなかつた。自然とそうだと思ひ初められたことはどこまでも深くお考えになり、特にとりたてていうこともない身分の女にまでも気をつかい必要以上に人目を気にしながら無関心な態度をとっていられたから、夜毎ひとり寝の状態ですごしておられた。かぐや姫のごとき実在の難い女を山の中、雲のなかから見つけ出さなければ、他人から女に対してそんなに関心を持っているとは思われまい、また一方女といえどもたがいに格別に情けを交わし得るほどの人ならば、いつも無関心であるとは思われまい、など遠慮がちにご性格もかえって苦いげであつた。第二皇子は女性関係に御身も無駄になるまでうわついておられ、賤しく貧しい人の家、どうということもない漁師の住いであろうと、これといった女がいると聞くや否や尋ねて行くかと思われるほどに関心が高くていらつしやるにつけて、第二、第三皇子それぞれにご性情の違いこそあれ、どちらも苦しい思いをなさつていらっしゃるようであつた。春宮はこういった方面のことには適度の節操をお持ちで世間なみであらせられた。

## 〔余説〕

一体、物語にあつては登場人物の性格や人間関係は筋の発展段階でおのずと読者に判らしめるような構成が常道であろう。この二段にあつては前段（注解二）に引き続き、人間関係を一括的に述べつつ、各人物の性格描写も試みてはいる。しかし、人間関係はあまりにも概括的であり、性格描写も残念ながら類型の域を一步も出ていない感じである。主要登場人物の営為や

思惟行為を執拗に追いながら副次的人物を点散させる中でこそ人物の性格描写も典型に近づく筈である。このように考えると、必然的にこの物語の価値評価にかかわってくるが、登場人物の多数化、それはとりもなおさず主要人物の多数化でもあり、ひいては筋の多極化という中世期のいわゆる擬古物語の特性のなかで把握されるべきであろう。

〔本文〕

まことや三位中将は、とし返て中納言になり給ひにき。みどりの空いとようはれてのどやかなるひるつかた、つれづれにおほしいで、かのみちのたよりのさとにことゝはんと、しのび出給ふ。かやうのすまひにて、おもひのほかにあはれならん人を見つけたらん時と、すゞろなるあらましごとのおぼゆるぞ、あぢきなきや。人きはがしきほど過て、御むまにていとしのびて、たそがれのほどにまぎれいり給へれば、いとちかき柳のかげいたうしげりて、おさくみえわかるべうもあらねば、けしきもゆかしうて、木かげにつたひよりてしばしきゝ給に、さうのことをわざとならずひきすさびたるつまをと、所がらにや、なべてきゝならし給ふみやこの中には、おさくたくひあるまじうおどろかるゝや、こよなきならん。ひめ君の御ことのねをいみじうめでたしとおぼしおぐるを、これはまゝまにきこゆる物から、せちにあひ行づきこめきたるものから、ふかく心にくきゆのね、いとようにかよひたるときこゆるに、おもひのほか心うつりはて、ちかきこしばのもとにあながちにつたひよりて見給へば、すだれなどもをしはりて、うちもあらはにみゆ。わかきかぎり五六人ばかり、すのこまでるこぼれて、花の心もとなきをまつなるべし。ことひく人は、はしらがくれにて、まほにもみえず。こぼれかゝれるひたいがみ・かんざしなどぞいひやらんかたなきは、うつりやすき心のみなしかと、せめてまもれど、すべて見しらぬ心ちぞする。

〔語釈〕

○まことや〓これまで一括して登場人物を素描してきたが、ここで物語の本筋にもとす口吻。 ○かのみちのたよりのさとに

ことゝはんとあゝの途次に知るきつかけとなつた山里を訪問しよう。 「かのみちのたより」は、かつて三位中将が中宮の病氣平癒のため比叡に登りその帰途尼上の庵にたちよつたことをいう。 注解(一)一四七頁に「うれしきみちのたよりに、かうさぶらひそめぬれば、かならずことさらになん、このかしてまりもきこゆべき」とあつた。 ○おもひのほかにあはれならん人を見つけたらん時あゝも予想外にすばらしい人(女)を見つけたらどうだろう。 ○御むまにてあゝ中納言ともなれば通常の外出は牛車であるが、この折はおし、のびであつたから馬に乗つて出かけたのである。 ○おさく／みえわかるべうもあらねばあゝ簡単に見つけられそうにもないから。 ○さうのことをわざとならずひきすさびたるつまをとあゝ箏の琴を弾くともなしにつまびいてる琴爪の音。「さう」は十三絃の琴。「つまをと」は琴爪で琴を弾く音。 ○なべてき／ならし給ふみやこの中にはあゝ普段聞き慣れてる京中の琴の音には。 ○ひめ君あゝ中納言の妹。 ○これはまさ／まにきこゆる物からあゝこちらの方が勝り氣味に聞えるものの。「まさ／ま」は「まさり／ま」と同意。 ○せらにあひ行づきこめきたるものからあゝ専ら優しく大様であるものの。「あい行」は愛敬。ここは「これはまさ／ま」と同様逆接条件が二つ並列している。 ○ふかく心にくきゆのねあゝ深く奥床しい「揺」の音。「揺」は絃を揺すり音に変化をつけることをいう。 ○こしはあゝ小柴垣。 ○花の心もとなきをまつなるべしあゝ桜花の早く咲くのを待つ意。引歌があるようだが適例を見ない。類するものとして古今六帖、第一「まだ咲かぬ花も山べに有べきを心もとなく過ぐる春かな」、あるいは元輔集「二月つごもりばかりにひんがしの院なる人のもとに遣しあゝ咲きぬとも思遣りてぞ惜しまる／心もとなく見えし桜を」などに類する発想か。 ○まほにも見えずあゝ金子武雄先生ご架蔵、九条家旧蔵本では「まほにも」だけであるが、宮内庁書陵部本によって「みえず」を補つた。 ○うつりやすき心のみなしかとあゝ移り易い心から見るとせいであろうか。

〔通 釈〕

そうそうあの三位中将は年が明けて中納言に昇進されたのであつた。緑色の空が大層よく晴れてのどかな昼間に、所在なきにふと思ひ出されて、比叡からの帰途知るきつかけとなつた山里を訪問しようと思いたたれ、ひそかにお出かけになつた。人里離れた山里の住いでもし予想外にすばらしい女性を見つけたでもしたら……と慢然とした期待を持たれるのもどうかと思われ。人騒がしい程が過ぎていつものと違つて馬に乗つて人目をしのびつつ、昏時に山里の住いの辺りにお入りになつた。住

いに大層近く柳がよく繁茂して、自分の姿も簡單には見つけられそうにもなく、山里の生活ぶりも見たくて、木陰にたいてい寄って暫く聞き耳をたてていたところ、箏の琴を弾くともなしにつまびいてる音が耳に入った。このように山深い場所がらであらうか、いつも聞きなれてる京中のものにはなかなかな同類がないのではなからうかと驚くにつけても、弾き手は名手なのであらう。妹の姫君の琴の音を至極すばらしいと思っておごっていたところ、こちらの方が勝り気味に聞え、また専ら優しく大様に聞える。しかしそうはいうものの姫君の琴の音によく似通つて聞えるにつけて、すっかり心移りしてしまつて、住いに近い小柴垣のもとに近寄るだけ近寄つてご覧になると、簾などみな押し開けて家の内まであらわに見えた。うら若い女が五六人ばかり簀子にまで出ていて、早くも桜花の咲くのを待つてゐる様子であつた。琴を弾く女は柱にかくれてはつきり見えな。い。面前にこぼれかかつてゐる額髪、かんざしなどいよいよ美しくなつて、移り易い心から見るせいであらうかと、じつと目をこらして見るが全く見たこともない女のように思われるのであつた。

〔本文〕

女三宮のせんざいみたまひし夕につきはてにしましゐの、猶のこりけるにや、たゞ時のまに身もくだけぬる心ちぞする。あまりかゝるにつけては、おそろしうぞあるや。物のへんげにて、うちむかひたらんかたちのむくつけからん時とさへ、あやしき所がらは、まことゝぞおぼえぬや。おくのかたより人きて、なにといふにか、すだれうちおろすまゝに人々もいりぬるは、いはんかたぞなきや。さてもたればかりならん、このあまうへはこありともきかざりし物を、こ中納言なくてもそこらひさしうなりにしを、こはいづくなりし人ぞ、とおもふぞひたすらたへがたき。心まよひに、かうてはえやむまじけれど、ありしとぐちぎまにたちいで、うちこはづくり給へば、宰相の君をぞいだしたる。「おもひかけざりし雪のまよひに、みだりがはしきまにていで侍にしかしこまりも、いつしかきこえさせんとおもひ給へしを、春のはじめ、なにとなきおほやけごとにまぎれ侍にけるたいくしさを、とがめさせ給はぬもかひなくなん」などの給へど、いたうものづゝみする人にて、ことつづけてきこえやらす、たゞ、「いともかしこきは、身づからきこえさせ侍べきを、みだり心ちつねはよろしからずのみなりまさり侍を、ためらひ侍を、かたはらいたく」とばかり、ほのかにつたへきこゆるいきざしも、いとらうたげなるを、これやありつるならんと、いと心はうつりはて、いでや、むらさきのゆか

りはあさからぬ物とこそおもひ給へしるを、むげにかずまへおぼされぬは、くちおしき色にぞ侍りける。

むさしのゝふるきあとあるみちならばかよふ心もあらましものを」

そこはかとなくうちなげき給へるも、人がらはわりなくぞきゝなざるゝ。

いかでかはかよひもなれむむさしのゝふるのゝみちも行衛しらねば

などきこゆるに、あまうへ、れいのずゞのをとこだいにて、よりおはするけはひすれば、いますこしすくよかにきこえなし給。おほかたの御物がたりも、いとこまかにきこえかはし給つゝ、ふけ行までいで給はず。

〔語釈〕

○女三宮のせんざいみたまひし夕につきはてにしましるの〓女三宮が前裁をご覧になつた夕方に薨去なされたその魂が。琴を弾く女性が女三宮に酷似しているのである。○あまりかゝるにつけて〓あまりにも女三宮に似ていつけて。○うちむかひたらんかたちのむくつけからん時とさへ〓面とむかいあつてゐる容貌が気味悪いと思ふような時とさへ。○まことゝぞおぼえぬや〓まことのことと感じられる。』や」は反語表現。○いはんかたぞなきや〓いいようもないほど残念なことだ。中納言の心中思惟。○こ中納言なくてもそこらひさしうなりにしを〓尼上の夫であつた故中納言が逝去してからかなり久しく経っているのに。故宮中納言は中納言（三位中将）の母上の実兄であり、尼上は中納言にとつて義理の叔母に当たる。（注

解（）、余説一五二頁参照）○かうてはえやむまじけれど〓このままで終らすまいとは思ふが。琴弾く人への懸想である。

○ありしとぐちさまにたちいでゝ〓かつて比叡からの帰途立ち寄つた戸口の方に出て。○宰相の君〓女房の一人。（注解（）一八一頁参照）○みだりがははしきさまにていで侍にしかしこまりも〓ぶしつげな状態で失礼いたしましたそのご挨拶も。

○なにとなきおほやけごとにまされ侍にけるたいゝしさを〓（年頭のことと）あれこれと公務に紛れておりました怠慢を。「たいゝし」は疎略だ、憚怠だの意。○いたうものづゝみする人にて〓大変遠慮深い人で。○身づからきこえさせべきを〓（尼君が）みずから申し上げるべきところ。○これやありつるならんと〓この人（宰相の君）が琴弾く人であらうかと。○むらさきのゆかりはあさからぬ物とこそおもひ給へしるを〓縁戚関係というものは浅くない因縁だと思ひ知つて

おりますのに。「むらさきのゆかり」は、古今・雑上「むらさきのひともとゆえに武蔵野の草はみながらあはれなりけり」及び、伊勢物語・第三九段「むらさきのいろきときはめもはるに野なる草木ぞわかれざりける」による。すなわち、中納言は

宰相の君を尼上の縁者と見做して、中納言と宰相の君の関係も浅からぬことをいうのである。「給へ」は謙讓の補助動詞。

○むげにかずまへおぼされぬは<sub>||</sub>全く人並みにあつかっていだげないのは。「かずまふ」は人並みに教える、敬意を表わすの意。○くちおしき色にぞ侍る<sub>||</sub>「色」は前掲の伊勢物語の歌「むらさきの……」の第二句による。○「むさしのの……」の歌<sub>||</sub>前掲の二首をふまえての詠。「ふるきあとあるみち」は、古くからつけられた道の意で、前々からの関係、縁、縁戚。「かよふ心」は互いに心が通じあうことをいう。「かよふ」は「みち」の縁語。○人がらはわりなくぞきくなさる<sub>||</sub>（中納言の）人柄はこの上もなく格別に思われる。「わりなし」はこの上ない、一通りでない、大変だ、の意。○「いかでかは……」の歌<sub>||</sub>「ふるのくみち」は、贈歌の「ふるきあとあるみち」と同意。「行衛しらねば」は、どういふ関係、縁であるか知らないのである。「かよひ」、「みち」、「行衛」は縁語。○れいのずくのをとこだいに<sub>||</sub>例のごとく数珠の音を古風にさせて。

### 〔通釈〕

ことによると女三宮が前裁をご覧になっていらつした夕べに息絶えて、その魂がまだここに残っているであろうかと驚きのあまりただもう瞬時に身も砕けてしまうのではないかとまで思われるのであった。あまりにも女三宮に似ているにつけても、恐ろしいほどの氣持がした。このように人里離れた場所が故、化け物で面とむかいあっている容貌の気味悪いと思うような時とさえ、真実のことと感じられるのであった。家の奥から人が近寄ってなにをいうのであろうか、簾をおろすとすぐに女たちも奥に入ってしまうのはどうも残念であった。それにしても琴弾く人は誰であらうか。この尼上には子供があつたとも聞いていなかったのに。夫の故中納言も逝去してから相当久しくなつてしまつてゐる。これはどういふ関係の人なのであろうか。などあれこれ思うにつけても、いよいよ耐え難い氣持になつてくるのであつた。すっかり思い乱れてこのままでは終らす筈はないと思うが、かつて立ち寄つた戸口の方にて、ことさらあらたまつて案内を乞うと、尼上は宰相の君に應對させるのであつた。「思ひのほかの降雪に迷つて、幸いにもかさやどりさせていだきながら、ぶしつげな状態で失礼しました。そのご挨拶も、早くに申し上げようと思ひながら、なにかや年頭の公務にまぎれて、懈怠にも今日になつてしまいました。それにしても私の怠慢を今までおとがめ下さらなかつたことを、返つてもの足りなく思ひます」などとおっしゃるが、取次ぎ役の宰相は大変慮慮深い人で、ことばを続けてもすらすらと話さず、ただ「随分恐れ多いことですが、直接私が応侍申し上げるべきところ、心の乱れた状態がいつも悪くばかりなつて参ります故、ちゅうちよしております。本当に恐縮に存じます」とだけかすかに尼上の口上を伝える口ぶりも大層可愛らしげであつた。それにつけても中納言は、これがあの琴弾く人であらうか

と、すっかり心移りしてしまつて、「ところで人の縁戚関係は浅くないものだと思ひ知っておりますが、あなたが私を人並みにあつかつて下さらぬのを残念に思ひます」といひながら次の歌を詠じ贈るのであつた。

むさしのゝふるきあとあるみぢならばかよふ心もあらまじもの

あなたが尼上の縁に連なる方であるならば、私とて尼上とは縁つづきですから、今までにおたがい心を通ひあうこともできましたのに……。それを思うと残念でたまりません。

宰相の君には、中納言がなんとなくなげいていらつしやる様子から、その人柄は格別だと思つたのであつた。

いかでかはかよひもなれむさしの、ふるのゝみちも行衛しらねば

尼上と特にどうという縁とてない私ですから、どうしてそう簡単にあなたと心を通ひあうことができましようか。

などと宰相の君が返し歌をしているうちに、尼上が例のごとく数珠の音を古風にさせて近寄つてこられる氣配がしたので、中納言は宰相と話された時とは違つて少し不粹にお話しになられた。一般的な話でも大層ごまかに交わされながら、夜が更けるまで中納言はお帰りにならないのであつた。

### 〔余説〕

前段から再び本筋にもどる。三位中将もいまは中納言。かつて比叡からの帰途かさやどりさせてもらった挨拶をと思ひ立ち音羽の山麓に出向く。挨拶とは実は名ばかりで、思わざる女性でも見つけたりはしないかとそらだのみの方が主目的。そのそらだのみも現実となつて現出した。かねてから意中の人、女三宮に酷似している女性を垣間見るのである。作者はあたかも出しおしめをするがごとく、女三宮と音羽の姫君が酷似していること、すなわち、姫君が今の皇后となんらかの關係にあることをほのめかしながら、いまだ素姓を明らかにしようとはせず、詭者の興味を後へ後へとばそうという魂胆である。

### 〔本文〕

さるべきついでつくりいで、おぼつかなき御うへを、かけくしきすぢにはあらず、をしあてにたづねきこえ給に、あなわづらはしや、人よりことにはづかしき御あたりを、とおぼせど、なか／＼けさうびもてかくさんにあひなきすぢなれば、たゞ、「むかし人の、おもひかけず、かこつゆへあるべきくまにものせしを、そむきすてし山のおくには、心ぐるしう思ひわづらはれながら、そのかたみにとおぼしたて侍し」など、まことならぬ

ことは、つゞきもはか／＼しからずのたまひなすに、ましてよくたどりよりにけるむさしのを、かこたれまきり給ふはて／＼は、ならはぬ心のあながちに、あやしきをもうちかすめ、いたうちなげき給へるも、こはよしなきわざかな、世かくれなからん物とはしりながら、人めまれなるいはほのなかをたのみけるよ、ついにはえかくしはてざらん物ゆへ、あやしかるべきわざかな、我身とて、その行衛をたしかにしらばや、ともかくもおもひさだむべきなど、たゞうちはいぶせき契の行衛ぞ、さすがにしらまほしかりける。いみじう心うしとおぼしいりたりしさまの心ぐるしきに、我いのちにもかへたてまつらんとおもひまどひしかど、その御けしきのたぐひなきにつけて、こはいかなりしなにのゆへとも、とひいでんかたなくてやみにし御はじめなれば、ともかくにもむねうちつづれ、みと見る人はあやしうげにたどりよるべきむらさきにもやと、そらおそろしうのみおぼえ給へば、たゞもてはなれ、世づきたるさまならぬよしをぞ、まほならずうちかすめ給ふ。

〔語 釈〕

○おぼつかなき御うへを||氣にかかっているお方(琴弾く人)のことを。 ○かけ／＼しきすぢにはあらず||浮気めいた方面のこととしてではなく。「かけ／＼し」は色めく、好色めく、の意。○人よりことにはづかしき御あたりを||他の人とは違つて中納言は特に氣のおかれるお方であるのに。「あなわづらはしや」から「御あたりを」まで尼上の心中思惟。 ○なか／＼けさうぶもてかくさんにあひなきすぢなれば||色めいたことのように隠すもかえつて思慮のないことであるから。「けさうぶ」は、恋愛めくの意。 ○かこつゆへあるべきくまにものせしを||悲願にくれるべきある事情があつて。「くま」は、事から事情。 ○そむきすてし山のおくには||世をそむいてこんな山奥に入った私にとつて。 ○そのかたみにとおぼしたて侍し||その人(むかし人の)のかたみとも思い預り育てております。この部分の主体を尼上とすると、「おぼしたて」の敬意表現がどうもしっくりいかない。「おもひたて」とありたいところ。かりにそのように解しておく。 ○ましてよくたどりよりにけるむさしのを|| (中納言としては) 大層よく尋ねあてた尼上の縁者(琴弾く人)を。ここから「いたうちなげき給へるも」まで中納言の状態。 ○ならばぬ心のあながちに||恋に情を深く染めるといったことに不慣れであるためにかえつて思ひめて。 ○こはよしなきわざかな||これはまあこまつたことだ。ここから「そらおそろしうのみおぼえ給へば」まで尼上の心中思惟。 ○世かくれなからん物とはしりながら||この世は秘密を隠しおおせるものでないとは知りながら。 ○人めまれなる

いはほのなかをたのみけるよ。人目もまれないような山里をたよりにしていたことだ。「いはほ」は音羽山麓の尼上の住いを比喩的に表現したもの。○その行衛をたしかにしらばや。姫君の将来の成り行きをはっきりと知りたいものだ。○たゞうちはへいぶせき契の行衛ぞ。たもうどうにも長い間釈然としない姫君のおかれてある宿縁の行末を。○いみじう心うしとおぼしいたりたりしさまの心ぐるしさに。姫君を托された方の。あまりにもお困りのご様子がお気の毒であるにつけても。○その御けしきのたぐひなきにつけて。姫君のご様子が格別に立派であったから。○とひいでんかたなくてやみにし御はじめなれば。問ひ尋ねる機会もなくして姫君をお世話し始ることになった故に。○みと見る人はあやしうげにたどりよるべきむらさきにもやと。姫君を見る人すべてがあの方との血縁があることを希代に推察しやしないかと。○たゞもてはなれ。ただもうすげない態度で。○世づきたるさまならぬよしをぞ。姫君が。世間なれしていない状態であることを。

〔通釈〕

中納言はしかるべき機会をつくって、先程から気がかりになっているお方（琴弾く人）のことを、懸想してみた方面のこととしてではなく、あて推量にお尋ねになった。尼上はどうもこれは困ったことになった、中納言は他の人より特に気のおかれるお方であるのにも思われたが、色めいたことのように隠すのめかえて思慮のないことであるから、ただ「かつてある方が思いのほかに悲嘆にくれねばならぬ事情下にあります、私のような世を捨てた者にとっては、気がかりにわずらわしく思われましたが、その方のかたみとしてお預りしたようなわけで……」などと、真実でないこととことばの続き具合もはかばかしくなくお話しにみられるのであった。中納言は大層よく尋ねあてた尼上の縁者を、恋情のあまり恨みなさるあげくのはては、純情であるだけにかえて思いつめて、いつてはならぬことまで口にし、至極お嘆きになった。尼上は、これはまあどうしよう。この世は秘密を隠しおさせるものでないとは知りながら、人目もまれないこの山里の住いをたよりにしていたのに。しかし、ついにはこの姫君を隠しおさせる筈もないから、さてどうしたものであろう。自分とて姫君の将来を知りたい、そうすればとにかく心も落着くことであろう、などとただもう長い間気にばかりかかっている姫君のおかれてある宿縁の行末を、さすがに知りたいと思うのであった。あの方があまりにもお困りのご様子、それが大変お気の毒であったのにつけても、尼上は自分の命にかえてさしあげようかとも思いまどったのであったが、姫君のご様子が格別にご立派であったから、またどうしてこんなことになったのでしょうか、などと問ひ尋ねる機会もなくして姫君をお預りし始めることになったのでこの度の中納言の出現にはなんにしてもすつかり心が動転してしまい、姫君を見るすべての人は希代にあの方と血縁があることを推察するのではな

ろうかと、恐しいとまでお思いになるから、ただただすげない態度で、姫君がまだ男女の情にうとい状態であることを、こ  
とばのはしはしにほのかしておられたのであった。

〔余 説〕

中納言は垣間見た「琴弾く人」が応対に出た宰相の君と思いこみ、一方尼上はそんなこととはつゆ知らず、中納言が恋情の  
対象としているのが預り育てている姫君と思いこんで、誤解のままに両者の対話、心中思惟が進行している様は大変おもしろ  
い。

ところで、中納言の出現が契機となって、尼上は姫君の行末をあれこれ案じ悩むことになるのだが、尼上としては、姫君が  
中納言から懸想されることを極度に心配している。それは姫君と中納言とが男女の契りを結ぶことのできないならかの理由  
があることを暗示している。近親相姦が皆無であったとはいえない王朝時代にあっても、親子、兄（弟）姉（妹）間のそれ  
は人道に悖るものとして考えられていたのであるから、姫君と中納言とがかなり近い血縁にあるのではなからうかと読者は想  
像するのである。もちろん作者はそれを期待している。